

昼の星、夜の星

karinomaki

はじめに

この文章では、短編をまじえて、カントの「単なる理性の限界内の宗教」について、少し書いてみたいと思います。短編についての解説を入れながら書きたいので、区別するために、短編と、その中の「私」には、かぎかっこをつけることにします。

短編「星のブローチ」

「私には、何も大切なものがなかった。漠然と、心が大切だということはわかっていたのだが、だからといって、自分が心をどうやって大切にすればいいのかもわからなかった。しかし、そんなむなしい日々が終わりを告げた。ある、とても小さなきっかけで。それは、街を歩いていたときだった。私は、ある店のショーウィンドーに、キラキラ光るものを見つけた。それは、ガラス玉がたくさんうめこまれた星の形のブローチだった。

私はそのときの気持ちをうまく言い表せないが、何かを感じた。ひらめきのようなものだった。私は、値段を見て、安かったので、そのブローチを思わず買ってしまった。」

「そのブローチを買って、私はすぐにつけてみたのだが、すぐに効果はあらわれなかった。しかし、何日かして、不思議な感覚がおとずれた。今までばらばらだった景色が、不思議な引力で、つなぎあわされていくのだ。」

解説（愛の力）

この引力とは何なのでしょう。これはおそらく、「執着」「愛着」だと思われます。どうして執着、愛着がいろんなものを「私」の中でつないだのか・・・このことを、カントの考え方から読み取ってみたいと思います。（この部分は、主に実践理性批判に書かれています。）カントは、「幸福」という感情を、人間の心を形作るものと、ある意味で考えています。しかし、限りなく、幸福の根本的な意味を、批判的に見えています。幸福には、自分だけは幸せでいたいという、自愛がついてくることが多いからです。

この話の「私」（かぎっこをつけます。）もまた、幸福を求めて、無意識に大切なものを探して街を歩いていました。そして、「幸福」を、物を愛するということから見出したのです。

幸福は、愛なのです。自愛も、もちろん愛の一つです。「私」は、きっと、さびしくて、心が飢えていたために、大切なものを、それまでの人生でつくれなかったのでしょう。

子供のころから愛されてきた人は、自然と、大切なものを持っていることが多いと思います。

自分が愛されているから、まわりのものを愛おしいと思うことができるのです。

しかし、この話の「私」は、愛するというのを、知らなかったのです。それで、たまたま気にいったブローチに、愛着がわき、愛の力を知ったものと思われます。

「昼の星」

「私は、そのブローチを、『昼の星』と名づけた。そして、ずっと胸につけていた。『昼の星』は、本当の空の星が輝かない昼の世界を、美しくつなぎあわせてくれた。どうして、一つのブローチにそんな力があるのだろう。ブローチは物だ。私は心がいちばん大切だと思っていたのに……。」

解説（心の沼）

心が沼に落ちているような経験を、生きていれば誰でも知っていると思います。そのとき、人は心が大切だと痛感するでしょう。そして、その状態から何が救ってくれるか・・・それは、愛だと思います。「昼の星」は、「私」が愛に気がついたきっかけだったのです。

しかし、それだけではなく、「私」は、星というものについて何か感じたのかもしれませんが。星は、昼は輝いてはいるけれど、太陽の光が強すぎて見ることはできません。しかし、人は、空の星が心の中で、いつでもともしびとなっているのかもしれませんが。星は、太陽の光に消されても輝き続け、そして暗い夜空を彩る素晴らしい存在なのです。

空の中で、いつでも輝き、太陽の光で消されても輝き続けている・・・そんな普遍的な存在が、「私」の心を少し照らしたのかもしれませんが。だから、街でブローチを見かけて、「私」の心は動いたのかもしれませんが。

解説（啓示）

宗教の言葉ですが、啓示という言葉があります。「人の力では知り得ないことを、神が教え示すこと」という意味ですが、まるで天からふってきたかのような、何かのきっかけによって、人生が改善することがそれに含まれると思います。それは、宗教的には、神の愛だと言われていると思います。カントは、「単なる理性の限界内の宗教」という著書において、啓示宗教（神の力による宗教）を批判的にとらえ、理性の限界内の「純粹理性宗教」の確立をさぐっていますが、どうして、啓示宗教を批判的にとらえているか・・・それは、人間が心の悪と戦って、自力で理性によって天への道筋を勝ち取っていかないと、天の力に頼りすぎてしまうからだ、読みとれます。つまり、心の沼（心の悪）と戦って初めて、神に通じる道筋を編み出して行けるのです。それが、純粹理性宗教だと思うのです。

「昼の星」は、「私」の心の沼から編み出された救い・・・そう考えることが、地に足をつけた、真に強い「純粹理性宗教」であるのかもしれませんが、しかし、カントは、啓示宗教を完全に批判しているのではなく、むしろ批判することによって、その可能性を確立しようとしていると思われれます。

「昼の星」は、「私」の心が編み出した救い・・・しかし、それと同時に、神の啓示でもあると考えられるはずで

解説（心の沼と愛）

神様は、心の沼でおぼれている人にこそ愛を注ぐ・・・宗教ではそんな考え方がたくさんあると思うのですが、カントは、人間の心の悪と戦うことを、「単なる理性の限界内の宗教」において基軸にしています。愛は、ただ与えられるものではなく、心の苦しみと戦って自分の力でつくりだすものなのかもしれません。その、強い姿勢があって初めて、本当に人に優しく愛を注げる人間になれるのかもしれません。心の沼と戦うことは、自力で愛を生み出すためであり、神の愛である、救い（啓示）をも導くのかもしれません。カントは、純粹理性宗教（心の沼との戦い）から、啓示宗教（神の愛）の可能性をさぐっていると言えます。

解説（昼の星の意味）

星は、一見、昼は輝きません。太陽が照っている時間が、基本的に人が活動する時間です。星は、一日を頑張った人に輝く、夜の勲章です。つらい時間をたえて、天から与えられるごほうびなのです。しかし、苦しかった日中も、しっかり「昼の星」として人を見守っている……。カントが、純粹理性宗教という、理性の限界内で、苦しみから編み出す宗教は、昼の星なのかもしれません。啓示のように、天から与えられる夜の星ではなく、昼の時間を頑張って、心で編み出す、見えない支え（純粹理性宗教）なのです。

「私」は、ドロドロした心の沼にいたからこそ、昼の星の価値に気がつき、街の中からそれを得た。しかし、自力でそれを手にいれたのではなく、啓示の可能性がある。なぜかという、昼の星は、夜の星につながっている。それは、愛によって。

この世界（昼の星の世界）を、私は愛したかった。だからこそ、夜の星（天の世界）から、啓示によって、星のブローチが降ってきた……。そう考えると、とても素敵だと思いませんか？人はこの昼の星の世界と戦って、天の星を仰ぐ。その姿勢があればこそ、啓示宗教（神の力）の成立を考えることができるということを、カントは批判的に書いているのだと思います。

「本当の星」

話の続きです。

「昼の星は、私の人生の光となった。やはり、心は沼に落ちて時々ドロドロになる。でも、私は、どんなときも天に向かって生きている・・・この世界を愛したいと思って生きているのだ。その気持ちが、私のばらばらだった気持ちをつなげ、天に向かわせるのだ。

いつか、このブローチは、私の苦しみをたくさん吸って、『苦しい』と言うだろう。そのとき、私の中にはもう、天への道筋をつくる軸ができていて、ブローチの役目は終わるかもしれない。でも、そのとき、本物の星が私の中で輝くだろう。永遠の宝物は、手につかめない本当の星なのだから。私は、昼の星から、夜の星に向かって生きていこう。」

本当の宝物

この話はこれで終わりにします。

本当の宝物とはなんでしょう。それは、生きる姿勢だと思います。真っ直ぐに自分の好きなことに打ち込む時間や、人生について真剣に考える時間がそうです。その姿勢は、真っ直ぐに天へと向かい、苦しみの地上に美しい天へのはしごをかけてくれます。地に足がついていないと、そのはしごは成立できません。カントは、地上に、苦しみながらかけるはしごをつくるために、いろんなことをあえて批判的に分析したのだと思います。カントが「単なる理性の限界内の宗教」で、本当に地に足をつけた、人間の理性による純粹理性宗教について書いたことは、「私」が、苦しみの中で、普遍的に輝く昼の星を見つけたことと同じなのでしょう。昼の星は、愛を導き、天と地をつなぐ。カントは、「単なる理性の限界内の宗教」で、昼の星（純粹理性宗教）について書いていますが、夜の星（啓示宗教）の可能性もさぐっているのでしょう。何かを愛するという柱は、天地をつらぬくのです。